国内事例 in Japan 2

被災野菜から始まる持続可能な農業／一般社団法人野菜がつくる未来のカタチ

台風や何らかの災害が起こるごとに、手間暇かけて作ってきた野菜が流通できず捨てられてしまう。こうした野菜を救うことで被災農家を支援し、持続可能な農業の仕組みづくりを目指して立ち上げたプロジェクトがチバベジだ。

被災野菜を救う

千葉県は農業産出額でみると全国3位の農業県で、首都圏の食を支えているといわれている。2019年9月9日、台風15号が直撃し農業は甚大な被害を受けた。この台風による千葉県の農林水産被害額は過去最高の427億5500万円（10月11日付千葉県発表）にものぼる。暴風雨の影響からビニールハウスの多くが倒壊し、生産意欲をなくした農家も多い。

千葉県育ちの安藤共人氏は、直ちに被災農家の支援をスタートした。ビニールハウス解体撤去のボランティアで出会った、フードロスに関心が高い鳥海孝範氏と意気投合し、共同代表としてチバベジを立ち上げた。

被災した野菜は多少傷があっても、味には全く問題がない。そこで傷や変形があり流通できない被災野菜を農家から買い取り、スーパーや飲食店に販売するだけでなく、野菜をジャムやピクルスなどの加工品にして販売し、売上を農家へ還元している。農業を持続的にするために、利益率が高く保存のきく加工品は大きく貢献する。例えば再び被災して野菜が出荷できなくなった時も、加工品の売上でその分のマイナスを補うことができる。また、保存がきくので被災した時に食べられるというメリットもある。

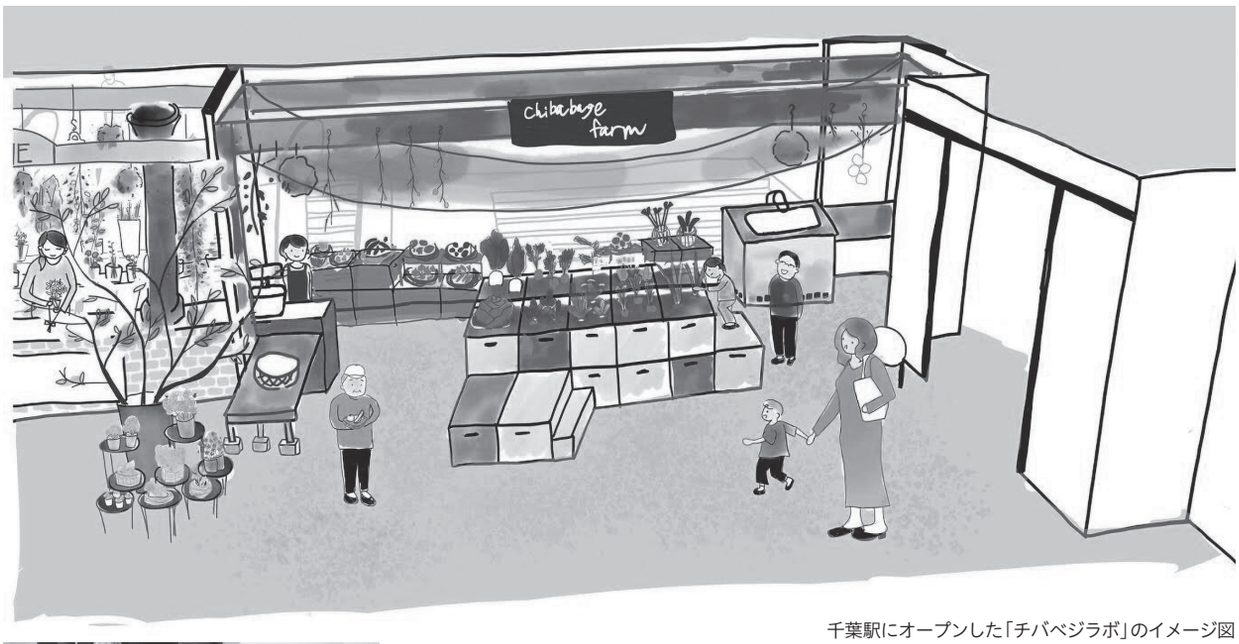
こうして今では約30の農家と、飲食店や直売所など約20の販売先と提携し支援の輪が広がっている※。

※2019年12月時点。

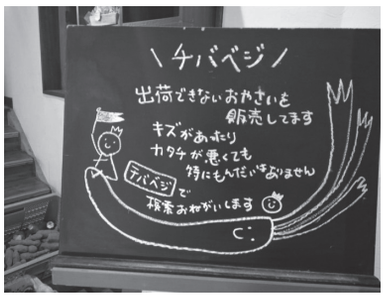
見た目で選ぶことをやめて廃棄野菜をなくす

例えばフランスではマルシェでの量り売りが一般的で、大小様々な野菜が販売されている。一方、日本のスーパーにはきれいで統一された形、大きさの野菜が並ぶ。何故だろうか。今の流通の仕組みでは、効率的かつ計画的に野菜を出荷する必要性から、段ボールに入らないものは「規格外」としてはじかれてしまう。それらは市場に出回らず、消費者の目に触れる機会はない。更に、消費者の習慣として、傷があるものよりも綺麗な野菜を選ぶ傾向がある。「昔はものを大事にする“もったいない”文化

代表理事の安藤共人氏と鳥海孝範氏



千葉駅にオープンした「チバベジラボ」のイメージ図



規格外の野菜を「チバベジ」と銘打って販売している

があり、例えば米を収穫したら藁まで飼料や様々な生活用品に利用し廃棄するものはほとんど無かった。今はそうした文化も徐々に失われている」と安藤氏は言う。更に、「見た目で選ぶことをやめて廃棄野菜をなくしたい。道の駅やスーパーなどにも規格外野菜の販路はあるが、ただ売るだけでは思いが伝わらない。その為に大事なのが地域のコミュニティ。コミュニティの中で”伝える”活動を地道に広げていく必要がある」と語る。

千葉駅の改札前にオープンした野菜で創るコミュニティ

そこで安藤氏は、2020年1月、千葉駅の駅ビル「ペリエ千葉」に「チバベジラボ」をオープンした。ここでは野菜をテーマに、思わず覗きたくなるような様々なブースが展開されている。例えば毎週土曜日はマルシェが開かれ、規格外の野菜でつくった加工品などが販売される。ここで買った野菜を食べてもらうことが、味や栄養は変わらないという事実を伝えるきっかけになる。土に埋まった野菜を引き抜く楽しい体験ができる一角もあり、子どもにとっての食育の場となっている。また、生産者の方々と直接会うこともできる。言葉を交わす中で、生産者の思いや苦労を知ると、野菜や農家への意識が変化し、野菜の購入者が増えていく。その農家が被災した際には、彼らが自主的に被災地を訪れ助けに行くようになるという。

近くに住む人や遊びにきた人、駅周辺に勤務する人など、様々な人が訪れる千葉駅のコミュニティ。安藤氏が大事にしているのは、拠点から20キロ圏内程度の地域だ。足をのばせば行ける距離なのだという。その中で、様々な人が集い、市民が自由に発信していくことがムーブメントとなり、文化が出来ていくという。このように野菜を入口に、日常を少しだけプラスにしながら、皆が幸せになるデザインを作っている。

来年以降も大型台風は来るかもしれない。高齢化が進む中で、農家の廃業が益々進むことが危惧されている。安藤氏は、「被災してからの対策ではなく、また災害は来るかもしれないものとして、予め対策を講じる必要がある。農家を支える仕組みがあり、地域の中で農家が守られていけば、野菜作りに適した良い土を持つ千葉で新規就農にチャレンジする人も現れるだろう。そうすれば地域の中でお金が流れ、持続可能な地域になる」と意気込む。千葉駅でのコミュニティづくりは、災害発生時にも強い地域づくりに繋がるだろう。

被災農家と支援する人々の『つながり』を深めていく、チバベジの活動に期待が集まる。